

## 『維摩經玄疏』 訳注（7）

菅野博史

本訳注は、『維摩經玄疏』 訳注（一）』（『大倉山論集』40、1996.12、235-261）、『維摩經玄疏』 訳注（二）』（『大倉山論集』45、1999.3、297-316）、『維摩經玄疏』 訳注（三）』（『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』所収、33-54、山喜房仏書林、2013.3）、『維摩經玄疏』 訳注（4）』（『創価大学人文論集』29、2017.3、33-72）、『維摩經玄疏』 訳注（5）』（『創価大学人文論集』30、2018.3、61-84）、『維摩經玄疏』 訳注（6）』（『創価大学人文論集』31、2019.3、115-148）の続編である。創価大学大学院の授業で、院生と『維摩經玄疏』を一緒に読んでいる。参加者は、大津健一、藤村光一、泉健一、向江千絵、須藤優の五氏である。なお、本稿の校正については、横溝靖彦修士のご協力を受けた。記して感謝の意を表する。

参考までに、今回の範囲の科文を下に示す。『維摩經玄疏』 卷第四の冒頭から545a29までである。全体的に説明すると、第一部「五重玄義の通釈」の後の第二部「五重玄義の別釈」（524b 3）の第一章「釈名」（524b 3）は、第一節「別名を釈す」（524b 4）、第二節「通名を釈す」（547b25）に分かれる。さらに、「別名を釈す」は、第一項「維摩詰を釈す」（524b21）と第二項「所説の法を釈す」（547a24）に分かれる。さらに、第一項「維摩詰を釈す」は、「1. 名義を翻訳す」（524b25）、「2. 三觀もて解釈す」（524c29）、「3. 四教分別を明かす」（532b 5）、「4. 淨名の本迹の義を辨ず」（545a29）に分かれる。今回の範囲は、「3. 四教分別を明かす」のなかが七段に分かれる（四教の名を釈す、所詮を辨ず、四教の位に約して淨無垢称の位を分別す、權実を明かす、觀心に約して四教を明

かす、諸経論を通ず、四教を用て此の経の文を釈す)の「権実を明かす」が終  
わる箇所までである。

科文において、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称  
については、テキストの箇所によって若干の表現の相違が見られるので、適  
宜処理する。科文の名称の後の( )に、大正蔵卷第38の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵卷第38の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETAを利用する。ただし、漢字は常用  
字体を用い、句読点は改める。『大日本統蔵経』については、『新纂大日本統蔵  
経』を使用し、略号をXとする。

## 『維摩経玄疏』科文

### 『維摩経玄疏』卷第四

- 3.34 円教に位を明かすに約して浄無垢称の義を釈す (540b13)
- 3.341 別・円の両教に位を明かすこと異なるを簡ぶ (540b23)
- 3.342 正しく円教に位を辨ずるを明かす (540c6)
- 3.3421 十信 (540c23)
- 3.3422 十住 (541a7)
- 3.34221 略して初発心住を釈す (541a8)
- 3.34222 類して九住を釈す (541b12)
- 3.3423 十行 (541b19)
- 3.3424 十廻向 (541b23)
- 3.3425 十地 (541b26)
- 3.3426 等覺地 (541c1)
- 3.3427 妙覺地 (541c4)
- 3.343 円教の位に約して、浄無垢称の義を釈す (542a10)
- 3.35 五味の譬に約して四教の位を顕わす (542a23)
- 3.4 権実を明かす (542b17)

- 3.41 略して権実を明かす (542b18)
- 3.411 一切は非権非実なるを明かす (542b24)
- 3.412 一切は皆な権なるを明かす (542b27)
- 3.413 一切は皆な実なるを明かす (542c1)
- 3.414 一切は有権有実なるを明かす (542c4)
- 3.42 位を格るを明かす (542c14)
- 3.421 三蔵教の位に約して後の三教を格る (542c16)
- 3.4211 通教を格る (542c18)
- 3.4212 別教を格る (542c28)
- 3.4213 円教を格る (543a3)
- 3.422 通教の位を用て後の二教の位を格る (543a8)
- 3.4221 別教を格る (543a9)
- 3.4222 円教を格る (543a13)
- 3.423 別教もて円教の位を格る (543a17)
- 3.43 興廃を明かす (543b18)
- 3.431 権經に興有り廢有るを明かす (543b19)
- 3.4311 三蔵教の興廢を明かす (543b20)
- 3.4312 通教の興廢を明かす (543c7)
- 3.4313 別教の興廢を明かす (543c18)
- 3.432 実教は興有りて廢せざるを明かす (543c29)

【翻訳】

維摩經玄疏卷第四

天台山修禪寺沙門智顓撰

3.34 円教に位を明かすに約して淨無垢稱の義を釈す

<sup>540b</sup> 第四に円教に位を明かすに約して淨無垢稱の義を釈すとは、此の教は、因縁即一実諦、不思議解脱、虚空仏性、大般涅槃、諸仏の法界の理を詮ず。若し

菩薩は此の教門を稟けば、理は深に非ず浅に非ずと雖も、証する者には、深淺の位無きにあらず。今、此の教の入道を明かすに、亦た具さに四門有れども、諸の大乗經は多く非空非有門を用うるなり。正しく此の經の諸菩薩、各おの不二法門に入るを説くに、一往同じと雖も、細検するに四門の別無きにあらざるが如し。而も多く非空非有門を用て、不思議解脱に入るなり。此の義は下に在れば、自ら当に見る可し。

これに就いて、略して三意と為す。一に別・円の兩教に位を明かすこと不同なるを簡ぶ。二に正しく此の教に位を辨ずるを明かす。三に円教の位に約して、淨無垢稱の義を釈す。

### 3.341 別・円の兩教に位を明かすこと不同なるを簡ぶ

第一に別・円の兩教に位を明かすこと不同なるを簡ぶとは、円教は既に円理を詮ずれば、略して円の義に八有りて、八別に異なるを明かす。已に前に説くが如し。今、但だ無明を断じて位を判ずるに高下不同なるに約するなり。

若し別教もて明かさば、三十心<sup>1</sup>に界内の結を断じて、即ち界外の無明を伏し、廻向の後心に至りて真智を發し、仏性中道の理を見て、一品の無明を断ずるを、初地に登ると名づく。乃至、十品の無明を断ずるを、名づけて十地と為す。等覺の後心に無明を断ずること方に尽く。妙覺は累外に蕭然たり。此れは前に分別するが如し。

円教<sup>540c</sup>に明かす所の若きは、初めの仮名の發心従り、即ち一心三觀もて隨喜の心を修し、十信の位に入る。界内の惑を断じ尽くし、即ち界外の無明を伏す。十住の初心は、円眞の智慧を發し、無明の初品を断ず。此れ従り四十心に皆な無明を断じ、等覺の後心に至りて方に尽くす。妙覺の極地は、累外に蕭然たり。究竟の菩提、無上の大涅槃と名づくるなり。此れは則ち位を判ずるに、高下殊別す。故に別・円の兩教に位を明かすこと同じからざるなり。

---

1 三十心 十住、十行、十廻向のこと。

## 3.342 正しく円教に位を辨ずるを明かす

第二に正しく円教の位を明かすとは、亦た還つて七位に約して五十二位の不同を明かす。一に十信、二に十住、三に十行、四に十廻向、五に十地、六に等覺地、七に妙覺地なり。但だ解する者は同じからず。有る師の言わく、「円教の頓悟は、一悟せば、即ち是れ仏にして、復た位別の殊なり無し」と。十地の位を説くは、鈍根人の為めなるのみ。『思益經』に云うが如し、「此の如く学ぶ者は、即ち一地従り一地に至らず」<sup>2</sup>と。又た、有る師の解して言わく、「円教は既に是れ頓悟なれば、初心に一悟せば、即ち究竟して円極なり」と。而して四十二位有りとは、但だ是れ物を化す方便にして、浅深の名を立つるのみ。故に『楞伽經』に云わく、「初地は即ち二地、二地は即ち三地なり。寂滅真如に、何の次有るや」<sup>3</sup>と。又た、有る師の言わく、「円教は頓悟にして、十住に至れば、即ち是れ十地なり」と。而して十行・十廻向・十地有りと説くは、此れは是れ重説なり。意謂わく、此の諸の解釈は、悉ごとく是れ偏えに取る。但だ平等の法界は、尚お悟と不悟とを論ぜず。孰れか浅と深とを論ぜん。不悟なれども悟を論ずるは、不浅不深なれども浅深を論ずるなり。諸の大乗經に理を明かすこと究竟なるを尋ぬるに、『華嚴』・『大集』・『大品』・『法華』・『涅槃』を過ぐる事無し。法界は平等にして。無説無示なるを明かす。而も菩薩の位行は、終自に炳然たり。是を以て今還りて七位に約して、以て円教の菩薩の位を明かすなり。

## 3.3421 十信

一に十信とは、利根の若きは、頓に深妙の善根を悟る。一切衆生は即ち大涅槃にして、復た滅す可からず、一切衆生は悉ごとく菩提の相なりと説くを

2 『思益經』に云うが如し、「此の如く学ぶ者は、即ち一地従り一地に至らず」『思益梵天所問經』卷第一、分別品、「若人聞是諸法正性、勤行精進、是名如說修行、不従一地至一地」(T15, no. 586, p. 36, c6-7)を参照。

3 『楞伽經』に云わく、「十地為初地、初地為八地。九地為七地、七地為八地。二地為三地、四地為五地。三地為六地、寂滅有何次」(T16, no. 671, p. 555, c14-18)を参照。

聞いて、即ち大慈大悲を發し、無作の四実諦を縁じて、四弘誓願を起こす。是れ円教の發菩提心と名づく。信心とは、一切衆生は即ち是れ真性解脱なりと信じ、一体三宝・一心三觀を具足し、二諦・三諦の理を觀じ、通達無礙にして、隨喜心の五品弟子の因を成ずる是れなり。若し三昧、及び陀羅尼、六根清淨を得ば<sup>4</sup>、即ち是れ十信の位に入るなり。若し十信の成就することを得ば、即ち能く真諦の理を見、界内の見思を斷じ、亦た能く俗諦の理を見、十法界の法を分別するに、心に謬亂無く、相似の中道の解を生じ、界外の無明を伏す。故に『仁王經』に云わく、「十善の菩薩は大心を發して、長く三界苦輪の海と別かる」<sup>5</sup>と。『法華經』に意根の清淨を明かして云わく、「未だ菩薩の無漏の智慧を得ずと雖も、其の意根の清淨は此の如し」<sup>6</sup>と。

### 3.3422 十住

二に十住の位を明かすとは、即ち二意と為す。一に略して初發心住を釈す。二に類して九住に通ず。

### 3.34221 略して初發心住を釈す

一に正しく初發心住の位を釈すとは、言う所の發心住とは、三種の心發するが故に、發心住と名づく。三徳涅槃を、名づけて住と為すなり。云何んが名づけて三種心發すと為すや。一には縁因の善心發す。二には了因の慧心發す。

---

4 若し三昧、及び陀羅尼、六根清淨を得ば 『法華經』妙音菩薩品、「此娑婆世界無量菩薩、亦得是三昧及陀羅尼」(T09, no. 262, p. 56, b18-19)、同卷第六、常不輕菩薩品、「是比丘臨欲終時、於虛空中、具聞威音王仏先所說法華經二十千萬億偈、悉能受持、即得如上眼根清淨、耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已、更增壽命二百萬億那由他歲、廣為人說是法華經」(同前, p. 51, a3-7)を参照。

5 『仁王經』に云わく、「十善の菩薩は大心を發して、長く三界苦輪の海と別かる」 『仁王般若波羅蜜經』卷第一、菩薩教化品、「十善菩薩發大心、長別三界苦輪海」(T08, no. 245, p. 827, b14)を参照。

6 『法華經』に意根の清淨を明かして云わく、「未だ菩薩の無漏の智慧を得ずと雖も、其の意根の清淨は此の如し」 『法華經』卷第六、法師功德品、「雖未得無漏智慧、而其意根、清淨如此」(T09, no. 262, p. 50, a26-27)を参照。

三には正因の理心発す。

一に縁因の善心発すとは、衆生は無量劫より来、所有る低頭、合掌、彈指、散華、發菩提心、慈悲、誓願、布施、持戒、忍辱、精進、禪定等の一切の善根は一時に開發し、一心に万行、諸波羅密を具足するなり。

二に了因の慧心発すとは、衆生は無量劫より来、大乘、乃至一の句・偈を聞き、受持、読、誦、解説、書写し、觀行修習し、所有る智慧は一時に開發して、真無漏を成ずるなり。

三に正因の理心発すとは、衆生は無始以来、仏性の真心は、常に無明の隱覆する所と為り、縁・了の両因の力もて無明の暗を破し、豁然として円かに顯わるるなり。

此の三種の心は開發するが故に、発心と名づく。住とは、三徳涅槃に住するなり。一に法身、二に般若、三に解脱なり。此の三は不縦不横なること、世の伊字の如きを、秘密<sup>7</sup>藏と名づく。真実心発するは、即ち是れ法身なり。了因心発するは、即ち是れ般若なり。縁因心発するは、即ち是れ解脱なり。三心若し発せば、世の伊字に同じく、仮名の行人は、不住の法を以て、此の三心に住す。即ち是れ三徳涅槃、秘密の藏に住す。故に初発心住と言うなり。若し三徳に住せば、即ち是れ不思議解脱に住す。即ち是れ大乘に住す。即ち是れ不住の法を以て般若に住す<sup>8</sup>。即ち是れ首楞嚴三昧に住し、心を修持すること、猶お虚空の如し。即ち是れ法性<sup>541b</sup>に住す。即ち是れ実相に住す。即ち是れ如如に住す。即ち是れ如来藏に住す。即ち是れ中道第一義諦に住す。即ち是れ法界に住す。即ち是れ畢竟空に住す。即ち是れ大慈・大悲・十力・四無畏・十八不共法に住す。即ち是れ四無礙智・神通・四摂・諸波羅密・一切三昧・陀羅尼門に住す。要を挙げて之れを言わば、即ち是れ真・応二身、一切仏法に住するなり。故に『華嚴經』に云わく、「初発心の時、便ち正覚を成ず。諸

7 密 底本の「蜜」を文意によって改める。

8 即ち是れ不住の法を以て般若に住す 『大智度論』卷第十一、「仏告舍利弗、菩薩摩訶薩以不住法住般若波羅蜜中、以無所捨法具足檀波羅蜜、施者、受者及財物不可得故」(T25, no. 1509, p. 139, a24-26)を参照。

法の真実の性を了達す。所有る聞法は、他に由りて悟らず<sup>9</sup>と。是れ菩薩、十種の智力<sup>10</sup>を成就し、究竟して虚妄を離れ、染無きこと虚空の如し。清浄妙法身は湛然にして一切に応ず<sup>11</sup>。当に知るべし、此れは即ち是れ真無漏を發して、無明の初品を斷ずるなり。即ち是れ此の經に一念に一切法を知るを明かす。即ち是れ道場に一切智を成就するが故なり。又た、即ち是れ此の經に不二法門に入りて、無生法忍を得るを明かすなり<sup>12</sup>。

### 3.34222 類して九住を釈す

二に類して九住を釈すとは、此の如く初住に三觀は現前し、無功用の心は、念念に法界の無量品の無明の称計す可からざるを斷ず。一往大分するに、略して十品の智・斷と為す。即ち是れ十住なり。故に『仁王經』に云わく、「入理の般若を、名づけて住と為す」<sup>13</sup>と。即ち是れ十番に進んで無漏の真明を發

---

9 『華嚴經』に云わく、「初發心の時、便ち正覺を成ず。諸法の真実の性を了達す。所有る聞法は、他に由りて悟らず」『六十卷華嚴經』卷第八、梵行品、「初發心時、便成正覺、知一切法真実之性、具足慧身、不由他悟」(T09, no. 278, p. 449, c14-15)を参照。

10 十種の智力 いわゆる仏の十力を指す。『六十卷華嚴經』卷第八、菩薩十住品、「此菩薩因初發心得十力分。何等為十。所謂是處非處智、業報垢淨智、諸根智、欲樂智、性智、一切至處道智、一切禪定解脫三昧正受垢淨起智、宿命無礙智、天眼無礙智、三世漏盡智、是為十」(T09, no. 278, p. 445, a7-11)、『維摩經略疏垂裕記』卷第七、「十種智力者暹云、彼經第十四卷初云、智首菩薩問文殊言、仏子菩薩云何得處非處智力、過未現在業報智力、根勝劣智力、種種界智力、種種解智力、一切至處道智力、禪解脫三昧染淨智力、宿住念智力、無障礙天眼智力、斷諸集智力」(T38, no. 1779, p. 805, b6-11)を参照。

11 究竟して虚妄を離れ、染無きこと虚空の如し。清浄妙法身は湛然にして一切に應ず『六十卷華嚴經』卷第九、初發心菩薩功德品、「諸仏妙色身 種種相莊嚴 究竟離虚妄 清浄真法身」(T09, no. 278, p. 458, a2-3)、同、「菩提心無量 清浄法界等 無著無所依 無染如虚空」(同前, p. 453, b29-c1)、同、「清浄妙法身 応現種種形……普應一切世 方便無不現」(同前, p. 454, c2-12)を参照。

12 此の經に不二法門に入りて、無生法忍を得るを明かすなり 『維摩經』卷中、入不二法門品、「説是入不二法門品時、於此衆中、五千菩薩皆入不二法門、得無生法忍」(T14, no. 475, p. 551, c25-26)を参照。

13 『仁王經』に云わく、「入理の般若を、名づけ住と為す」『仁王般若波羅蜜經』卷第



して、同じく中道・仏性・第一義諦の理に入る。不住の法を以て、浅き従り深きに至り、仏の三徳涅槃の理に住す。即ち是れ十品の智慧は、一切の仏法に住す。故に十住と名づく。

### 3.3423 十行

三に十行を明かすとは、即ち此の十住の真心、一心に一切行を具し、念念に自然に平等法界の海に進趣し流入し、十品の無明を破し、十品の智・断、一切の諸行・諸波羅蜜を証し、自然に増長して、自行・化他の功德を出生し、虚空法界と等し。故に十行と名づくるなり。

### 3.3424 十廻向

四に十廻向を明かすとは、一心の真明、解・行は念念に開発し、心心寂滅して、自然に平等法界の薩婆若海に廻入す。又た、進んで十品の無明を破し、十品の智・断を証す。故に十廻向と名づくるなり。

### 3.3425 十地

五に十地を明かすとは、無漏の真明は、無功用の道に入ること、猶お大地の能く一切の仏法を生ずるが如し。法界の衆生を荷負して、普く三世の仏地に入り、広大なること法界の如く、究竟なること虚空の如し<sup>14</sup>。又た、進んで

---

一、菩薩教化品、「入理般若名為住、住生德行名為地、初住一心足德行、於第一義而不動」(T08, no. 245, p. 827, b25-27) を参照。また、『法華玄義』卷第五上にも、「初住既爾、三觀現前、無功用心断法界無量品無明、不可称計。一往大分、略為十品智断、即是十住故。仁王云、入理般若名為住。即是十番進發無漏、同見中道仏性第一義理。以不住法、從浅至深、住仏三徳及一切仏法、故名十住位」(T33, no. 1716, p. 734, b8-13) と類似の文がある。

14 普く三世の仏地に入り、広大なること法界の如く、究竟なること虚空の如し  
『六十卷華嚴經』卷第二十三、十地品、「金剛藏菩薩即從三昧起、告諸菩薩言、諸仏子、是諸菩薩願決定、無有過、不可壞、廣大如法界、究竟如虚空、遍覆一切十方諸仏世界衆生、為救度一切世間、為一切諸仏神力所護。何以故。諸菩薩摩訶薩入過去諸仏智地、亦入未來、現在諸仏智地」(T09, no. 278, p. 542, c19-24) を参照。

十品の無明を破し、進んで十品の智・断を証す。此れに約して已て十地を明かすなり。<sup>541c</sup>

### 3.3426 等覺地

六に等覺地を明かすとは、無明の源を窮め、重玄門に入り、辺際智満ち、畢竟清浄にして、中道の山頂に登り、無明の父母と別る。猶お是れ後心の金剛無闕なるがごとし。即ち是れ有所断者と名づけ、有上士と名づくるなり<sup>15</sup>。

### 3.3427 妙覺地

七に妙覺地を明かすとは、究竟の解脱、無上の仏智なり。故に無所断者と言ひ、無上士と名づく。此れは即ち是れ究竟の後心、三徳の不縦不横の大涅槃なり。大涅槃を、諸仏の法界と名づく<sup>16</sup>。豎に深く横に闊く、能く二十五三昧を用て、普く衆生を化す。隠顕に十番もて物を利し、究竟周普す。譬えば大樹の根若し深極ならば、枝條も亦た大なるが如し。若し実相の智慧もて源を窮め性を尽くさば、化用の功は、則ち法界に弥満し、無方の大用は、究竟して円極なり。故に『大智論』に云わく、「智度の大道は、仏従り来り、智度の深海は、仏、底を窮むるなり」<sup>17</sup>と。『大品経』に云わく、「荼を過ぎて、字の説く可

---

15 即ち是れ有所断者と名づけ、有上士と名づくるなり 『南本涅槃経』卷第十六、梵行品、「云何無上士。上士者、名之為断。無所断者、名無上士。諸仏世尊無有煩惱、故無所断、是故号仏為無上士」(T12, no. 375, p. 711, c12-15)を参照。また、『法華玄義』卷第五上に、「等覺地者、觀達無始無明源底、辺際智満、畢竟清浄。断最後窮源微細無明、登中道山頂、与無明父母別、是名有所断者、名有上士也」(T33, no. 1716, p. 734, c9-12)と類似の文がある。

16 大涅槃を、諸仏の法界と名づく 『南本涅槃経』卷第四、四相品、「大涅槃者、即是諸仏如来法界」(T12, no. 375, p. 629, b15)を参照。

17 『大智論』に云わく、「智度の大道は、仏従り来り、智度の深海は、仏、底を窮むるなり」 『大智度論』卷第一、「智度大道仏従来、智度大海仏窮尽、智度相義仏無礙、稽首智度無等仏」(T25, no. 1509, p. 57, c11-13)を参照。

き無し」<sup>18</sup>と。『大涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なり」<sup>19</sup>と。若し此れを作して位を辨ぜば、前の三十心より来、諸地は皆な是れ寂滅の真如、平等の法界、不思議にして、次位無きの位なり。

問うて曰う。此の如き円位は、何れの経論に出ずるや。

答えて曰う。『大涅槃經』に月愛三昧を明かさく、「初めの一日従り十五日に至りて、光明は漸漸に増長す。又た、十六日従り三十日に至りて、光明は漸漸に減尽す」と<sup>20</sup>。月光漸漸に増長すとは、智徳の十五の摩訶般若の光明を譬うるなり。漸漸に減尽すとは、十五の断徳の無累解脱減尽するなり。十五種の智・断とは、三十心を三の智・断と為し、十地を十の智・断と為し、等覚を一の智・断と為し、妙覚を一の智・断と為す。合して十五の智・断と為す。故に初めの一日従り十五日に至るに、月を以て譬えと為すなり。月の体は、即ち法身を譬う。法身は是れ一なり。光明の漸増するは、般若の智徳の不生なれども生なるを譬う。光明の漸減するは、解脱の断徳の不減なれども減なるを譬う。故に『涅槃經』に明かさく、「初め従り諸子を秘密の蔵、三徳涅槃に安置し、然る後に我れも亦た当に此の秘密蔵の中に於いて、般涅槃すべし」<sup>21</sup>と。此の最後究竟の涅槃を、名づけて不生不生と為す。般若は畢竟する

18 『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字の説く可き無し」 『大品般若經』 卷第五、広乗品、「茶字門、入諸法辺竟処故不終不生、過茶無字可説」(T08, no. 223, p. 256, b10-11)を参照。

19 『大涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なり」 『南本涅槃經』 卷第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「仏言、善哉、善哉。善男子、不生不生不可説、生生亦不可説、生不生亦不可説、不生不生亦不可説、生亦不可説、不生亦不可説、有因縁故亦可得説」(T12, no. 375, p. 733, c9-12)を参照。

20 『大涅槃經』に月愛三昧を明かさく、「初めの一日従り十五日に至りて、光明は漸漸に増長す。又た、十六日従り三十日に至りて、光明は漸漸に減尽す」 『南本涅槃經』 卷第十八、梵行品、「大王、譬如月光、從初一日至十五日、形色光明漸漸増長。月愛三昧亦復如是、令初發心諸善根本漸漸増長、乃至具足大般涅槃。是故復名月愛三昧。大王、譬如月光從十六日至三十日、形色光明漸漸損減。月愛三昧亦復如是、光所照処、所有煩惱能令漸減。是故復名月愛三昧」(T12, no. 375, p. 724, b11-17)を参照。

21 『涅槃經』に明かさく、「初め従り諸子を秘密の蔵、三徳涅槃に安置し、然る後に我れも亦た当に此の秘密蔵の中に於いて、般涅槃すべし」 『南本涅槃經』 卷第二、哀歎

に不生不滅にして、更に惑として断ず可き無きなり。又た、『法華經』に、開示悟入を明かす<sup>22</sup>。南岳師解して云わく、「即ち是れ円教の四十心なり」<sup>23</sup>と。又た、『大品經』に、四十二字門を明かす。初めの阿字門にも亦た四十二字門を具し、後の茶字門にも亦た四十二字門を撰す<sup>24</sup>。南岳師は、即ち是れ円教の四十二地の異名なりと解す<sup>25</sup>。『仁王經』に明かさく、「三賢・十聖の忍中の行は、唯だ仏一人のみ能く源を尽くす」<sup>26</sup>と。即ち是れ円通の位相を説くなり。『瓔珞經』に、「三賢の菩薩は、自然に薩婆若海に流入す」と云う<sup>27</sup>は、即ち其の義なり。『華嚴經』に云わく、「初めの一地从り、即ち一切諸地の功德を具足す」<sup>28</sup>

---

品、「我今当令一切衆生及我諸子四部之衆、悉皆安住秘密藏中。我亦復当安住是中、入於涅槃」(T12, no. 375, p. 616, b8-10)を参照。

22 『法華經』に、開示悟入を明かす 『法華經』卷第一、「諸仏世尊、欲令衆生開仏知見、使得清淨故、出現於世。欲示衆生仏之知見故、出現於世。欲令衆生悟仏知見故、出現於世。欲令衆生入仏知見道故、出現於世。舍利弗、是為諸仏以一大事因縁故出現於世」(T09, no. 262, p. 7, a23-28)を参照。

23 南岳師解して云わく、「即ち是れ円教の四十心なり」 出典未詳。「四十心」は、十住・十行・十廻向・十地を指す。

24 『大品經』に、四十二字門を明かす。初めの阿字門にも亦た四十二字門を具し、後の茶字門にも亦た四十二字門を撰す 『大品般若經』卷第二十四、四摂品、「当善学分別諸字、亦当善知一字乃至四十二字。一切語言皆入初字門、一切語言亦入第二字門、乃至第四十二字門、一切語言皆入其中。一字皆入四十二字、四十二字亦入一字」(T08, no. 223, p. 396, b21-25)を参照。

25 南岳師は、即ち是れ円教の四十二地の異名なりと解す 慧思に『四十二字門』の著作があったが、現存しない。ただし、宝地房証眞の『四十二字門略抄』は現存する。

26 『仁王經』に明かさく、「三賢・十聖の忍中の行は、唯だ仏一人のみ能く源を尽くす」 『仁王般若波羅蜜經』卷第一、菩薩教化品、「三賢十聖忍中行、唯仏一人能尽源、仏衆法海三宝藏、無量功德撰在中」(T08, no. 245, p. 827, b12-14)を参照。

27 『瓔珞經』に、「三賢の菩薩は、自然に薩婆若海に流入す」と云う 『菩薩瓔珞本業經』卷上、賢聖学観品、「二種法身变易受生、三觀現前常修其心入百法明門、所謂十信、一信十故百法明門、十三故煩惱畢竟不受、心心寂滅法流水中、自然流入薩婆若」(T24, no. 1485, p. 1014, c23-27)を参照。

28 『華嚴經』に云わく、「初めの一地从り、即ち一切諸地の功德を具足す」 『六十卷華嚴經』卷第二十五、十地品、「解脱月菩薩問金剛藏菩薩言、仏子、菩薩摩訶薩但七地具足助菩提法、一切諸地亦能具足。金剛藏言、仏子、菩薩摩訶薩於諸地中皆悉具足助菩

と。『大智度論』に云わく、「菩薩は初発心従り、涅槃を觀じ道を行じ、乃至、道場に坐す」<sup>29</sup>と。此の如き等の經論に明かす所は、豈に備さに述ぶ可けんや。引証・解釈は、具さに『四教大本』<sup>30</sup>に在り。

### 3.343 円教の位に約して、淨無垢称の義を釈す

第三に円教の位に約して、淨無垢称の義を釈すとは、維摩大士、若是<sup>も</sup>し位は法身の補処に在らば、即ち是れ等覺、金剛無垢の位なり。智慧は將に円かならんこと、十四日の月の如し。無明は將に尽きんこと、二十九日の月の如し。故に『智度論』に云わく、「善賢・文殊も亦た十力・四無所畏有ること、十四日の月の如し。仏も亦た十力・四無所畏を具足すること、十五日の月の如きなり」<sup>31</sup>と。法性の理顯わるるが故に、名づけて淨と為す。無明惑の垢は將に

---

提法、遠行勝故、於此地撰、何以故。諸菩薩摩訶薩於七地中功行具足、入智慧神通道故。仏子、菩薩於初地發願緣一切仏法故、具足助菩提法。二地除心惡垢故、具足助菩提法。三地願轉增長得法明故、具足助菩提法。四地入道故、具足助菩提法。五地隨順行世間法故、具足助菩提法。六地入甚深法門故、具足助菩提法。此第七地起一切仏法故、具足助菩提法。何以故。菩薩摩訶薩於此地中、得諸智慧所行道、以是力故、第八地自然得成。仏子、譬如二世界、一定清淨、一定垢穢、是二中間、難可得過。欲過此界、當以神通及大願力。菩薩亦如是、行於雜道、難可得過。以大願力、大智慧力、大方便力故、爾乃得過」(T09, no. 278, p. 561, c9-27)、同卷第一、世間淨眼品、「同一法性、覺慧廣大、甚深智境、靡不明達、住於一地、普撰一切諸地功德、無上智願皆已成滿、具足如來深広密教、悉得一切仏所共法、皆同如來行地、德力、一切三昧海門皆得自在、於衆生海如応示現、隨其所行、善能建立」(同前, p. 395, b24-29)、同卷第十、明法品、「具足清淨甚深智慧、菩薩一切諸地功德、諸波羅蜜」(同前, p. 458, c28-29)を参照。

29 『大智度論』に云わく、「菩薩は初発心従り、涅槃を觀じ道を行じ、乃至、道場に坐す」『大智度論』卷第六十一、「從初發心行六波羅蜜、入菩薩位、得十地、乃至坐道場。是中菩薩自修福德。和合得仏道、乃至入無余涅槃。滅度後、舍利及遺法、皆是仏自身功德和合」(T25, no. 1509, p. 488, b21-24)を参照。

30 『四教大本』『大本四教義』を指す。

31 『智度論』に云わく、「善賢・文殊も亦た十力・四無所畏有ること、十四日の月の如し。仏も亦た十力・四無所畏を具足すること、十五日の月の如きなり」『大智度論』卷第二十九、「菩薩雖作仏身、不能遍滿十方世界。仏身者、普能遍滿無量世界、所可度者、皆現仏身。亦如十四日月、雖有光明、猶不如十五日」(T25, no. 1509, p. 273, b13-

尽きんが故に、無垢と称す。等覚の智慧は理に<sup>かな</sup>称い、円明は機に称う。而して照らすが故に、浄無垢称と言うなり。是れ則ち位は妙覚に隣る。若し円心を論ぜば、乃至、十方の仏土に、十法界の身の八相成道を現ず。此の土に宜しく補処の形を見るべし。故に無動仏の所に居して、補処の菩薩と為り、忍界に來遊して、諸菩薩を誨す。皆な疾を問うに<sup>た</sup>任えずと称するは、正しく円を以て偏を破すればなり。又た、入不二法門を説いて、独り黙然たるは、円教の内証の法門、説示す可からざるを表わすなり。

### 3.35 五味の譬えに約して四教の位を顕わす

第五に五味の譬えに約して、四教の位を顕わすとは、『大涅槃經』に五味の譬えの不同を明かして、以て四教の位を辨ずることの不同の相を成ずるなり。『經』に云わく、「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生酥の如く、阿那含は熟酥の如く、阿羅漢・辟支仏は醍醐の如し」<sup>32</sup>と。此の譬えの意は、恐らくは是れ三蔵教に位を明かすを顕わすなり。『經』に又た云わく、「凡夫は乳の如く、声聞は酪の如く、辟支仏は生酥の如く、菩薩は熟酥の如く、仏は醍醐の如し」<sup>33</sup>と。此の譬えの意は、恐らくは通教に位を明かすを顕わすなり。

---

16)、同卷第二十九、「復次、又如王子名鳩摩羅伽、仏為法王。菩薩入法正位、乃至十地故、悉名王子、皆任為仏。如文殊師利、十力、四無所畏等悉具仏事故、住鳩摩羅伽地、広度衆生」(同前, p. 275, b22-26)を参照。

32 『經』に云わく、「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生酥の如く、阿那含は熟酥の如く、阿羅漢・辟支仏は醍醐の如し」 厳密には一致しないが、『南本涅槃經』卷第三十二、迦葉菩薩品、「須陀洹人、斯陀含人断少煩惱、仏性如乳。阿那含人、仏性如酪。阿羅漢人、猶如生酥。從辟支仏至十住菩薩、猶如熟酥。如來仏性猶如醍醐」(T12, no. 375, p. 818, c6-9)を参照。また、『摩訶止観』卷第三下、「今用涅槃五譬積成此意。第六云、凡夫如乳、須陀洹如酪、斯陀含如生酥、阿那含如熟酥、阿羅漢・辟支仏・仏如醍醐」(T46, no. 1911, p. 33, c22-25)を参照。

33 『經』に又た云わく、「凡夫は雑血の乳の如く、羅漢は清浄の乳の如く、辟支仏は酪の如く、菩薩は生・熟酥の如く、仏は醍醐の如し」 『南本涅槃經』卷第九、菩薩品、「善男子、声聞如乳、縁覚如酪、菩薩之人如生熟酥、諸仏世尊猶如醍醐。以是義故、大涅槃中説四種性而有差別」(T12, no. 375, p. 664, b18-21)を参照。

『經』に又た云わく、「凡夫は542b雑血の乳の如く、羅漢は清浄の乳の如く、辟支仏は酪の如く、菩薩は生・熟酥の如く、仏は醍醐の如し」<sup>34</sup>と。此の譬えの意は、恐らくは別教に位を明かすを顕わすなり。『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」<sup>35</sup>と。忍辱草とは、八聖道をたと論え、乳は十二部經を論う<sup>36</sup>。随いて能く八聖道を修する者有らば、即ち仏性を見て、大涅槃に住す。此れは即ち円教の菩薩、初發心従り、即ち仏知見を開き、仏性を見て、大涅槃に住することを譬うるなり。『涅槃經』に、此の四譬<sup>37</sup>を明かすは、四教に位を明かすを譬う。其の義は宛然たり。若し四教に位を明かすこと同じからざるを信ぜずば、云何んが此の五味、四種の譬えを消釈せんや。今、前の四教に位を明かすを用て、此の四譬に合す。一往、目視するがこと似如し。祇自だ聖人の密<sup>38</sup>意は知り難し。何ぞ定執す可けん。又た、『涅槃經』に云わく、「譬えば人有りて毒を乳に置き、乃至、醍醐も亦た能く

34 『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」『南本涅槃經』卷第三十二、迦葉菩薩品、「善男子、一切無明煩惱等結悉是仏性。何以故。仏性因故。從無明行及諸煩惱得善五陰、是名仏性。從善五陰乃至獲得阿耨多羅三藐三菩提。是故、我於經中先說衆生仏性如雜血乳、血者即是無明行等一切煩惱、乳者即是善五陰也。是故、我說從諸煩惱及善五陰得阿耨多羅三藐三菩提。如衆生身皆從精血而得成就、仏性亦爾。須陀洹人、斯陀含人斷少煩惱、仏性如乳。阿那含人、仏性如酪。阿羅漢人、猶如生酥。從辟支仏至十住菩薩、猶如熟酥。如來仏性猶如醍醐」(同前, p. 818, b27-c9)を参照。

35 『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品、「善男子、雪山有草、名為忍辱。牛若食者、則出醍醐。更有異草、牛若食者、則無醍醐」(同前, p. 770, b12-14)を参照。

36 乳は十二部經を論う 『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品、「更有異草、牛若食者、則無醍醐。雖無醍醐、不可說言雪山之中無忍辱草。仏性亦爾。雪山者、名為如來。忍辱草者、名大涅槃。異草者、十二部經」(同前, p. 770, b14-17)を参照。

37 四譬 直前の『涅槃經』の四つの引用文(前注28-31を参照)に見られる四つの譬喩。

38 密 底本の「蜜」を宋本によって改める。

人を殺すが如し<sup>39</sup>と。此の譬えは、応に両用を得べし。若し経教の五<sup>40</sup>味に義を明かすに対せば、処々に皆な仏性を見て涅槃に入ることを得るなり。此れは即ち是れ不定の教門なり。事は下に在りて釈す。若し是れに約して殺人の義を明かさば、四位・五味の根縁は不定にして、其の大乗の機に随いて発す。即ち皆な如来の滅度を以て之れを滅度す<sup>41</sup>。故に殺人の義に同じきなり。

### 3.4 権実を明かす

第四に権実を明かすとは、此れに就いて即ち三意と為す。一に略して権実を明かし、二に位を格<sup>はか</sup>り、三に興廢を明かす。

#### 3.4.1 略して権実を明かす

第一に権実を明かすとは、権は是れ暫く用うるの名なり。実は永く施すを以て義と為す。方便波羅蜜は、情に随いて近益するが故に、名づけて権と為し、智波羅蜜は、理に称いて究竟するが故に、名づけて実と為すなり。是れ則ち三教は暫く物情に赴くが故に、名づけて権と為し、円教は究竟して物を利するが故に、名づけて実と為す。権実を分別するに、応に四義を須うべし。一に一切は非権非実なるを明かし、二に一切は皆な権なるを明かし、三に一切は皆な実なるを明かし、四に一切は権有り実有るを明かす。

---

39 『涅槃經』に云く、「譬えば人有りて毒を乳に置き、乃至、醍醐も亦た能く人を殺すが如し」『南本涅槃經』卷第二十七、師子吼菩薩品、「譬如有人置毒乳中、乃至醍醐皆悉有毒。乳不名酪、酪不名乳、乃至醍醐亦復如是。名字雖變、毒性不失、遍五味中皆悉如是。若服醍醐亦能殺人、實不置毒於醍醐中。衆生仏性亦復如是、雖處五道受別異身、而是仏性常一無變」(T12, no. 375, p. 784, c9-14)を参照。

40 五 底本の「六」を、文意と『四教義』卷第十二、「若対経教五味明義、処処皆得見仏性」(T46, no. 1929, p. 765, c22-23)によって改める。

41 即ち皆な如来の滅度を以て之れを滅度す 『法華経』譬喻品、「我有無量無辺智慧、力、無畏等諸仏法蔵、是諸衆生皆是我子、等与大乗、不令人独得滅度、皆以如来滅度而滅度之」(T09, no. 262, p. 13, c5-8)を参照。



### 3.411 一切は非権非実なるを明かす

一に一切は非権非実なるを明かすとは、若し四不可説の無説を論ぜば、則ち四教の分かつ可き無し。三教無ければ、即ち権に非ず、円教無ければ、則ち実に非ず。是れ則ち一切の仏法は皆な非権非実なり。

### 3.412 一切は皆な権なるを明かす

二に一切は皆な権なるを明かすとは、若し四不可説なるも、因縁有れば而も説くを論ぜば、是れ則ち四教は皆な是れ権巧に物を化するなり。故に仏の言わく、「我れ道場に坐する時、一法の実なるも得ず。空拳もて小児を誑して、以て一切を度するなり」<sup>542c たぶらか</sup>42と。

### 3.413 一切は皆な実なるを明かす

三に一切は皆な実なるを明かすとは、説くこと無くして而も説く。説けば必ず機に応ず。縁に赴くの益は、其の義皆な実なり。是の故に四教は皆な実と名づくるなり。故に『智度論』に云わく、「世界・対治・為人有るが故に実なり。第一義有るが故に実なり」<sup>43</sup>と。此れは即ち皆な実にして虚ならざるの義なり。

### 3.414 一切は権有り実有るを明かす

四に一切に権有り実有るを明かすとは、仏法を至論すれば、権に非ず実に非ざれども、而も能く権、能く実なり。四不可説は、則ち権実の而も分かつ可き無し。故に非権非実と言う。説かずして而も説く。三教は即ち是れ権なり。円教は即ち是れ実なり。

但だ一家に権実を明かすに、三種の義有り。一に化他の権実、二に自行・

42 仏の言わく、「我れ道場に坐する時、一法の実なるも得ず。空拳もて小児を誑して、以て一切を度するなり」『大智度論』卷第二十、「我坐道場時、智慧不可得、空拳誑小兒、以度於一切」(T25, no. 1509, p. 211, a4-6)を参照。

43 『智度論』に云わく、「世界・対治・為人有るが故に実なり。第一義有るが故に実なり」『大智度論』卷第一、「仏法中、有以世界悉檀故実、有以各各為人悉檀故実、有以対治悉檀故実、有以第一義悉檀故実」(同前, p. 59, b22-24)を参照。

化他の権実、三に自行の権実なり。若是し化他の権実ならば、前の三教は但だ是れ権なるのみに非ず。此の権の中に就いて、亦た各おの権実を説くなり。若し自行・化他の権実を明かさば、即ち是れ前の三教は並びに是れ権の用なり。円教に明かす所は一向是れ実なり。若し自行の権実を論ぜば、即ち円教の位に就いて辨ず。中道を照らすを實と為し、双べて二諦を照らすを権と為すなり。

### 3.42 位を格るを明かす

第二に位を格るを明かすとは、即ち三意と為す。一に三蔵教の位に約して、後の三教を格る。二に通教の位に約して、後の二教を格る。三に別教の位に約して、後の円教を格る。

#### 3.421 三蔵教の位に約して後の三教を格る

一に三蔵教の位に約して、後の三教を格るとは、即ち三意と為す。一に三蔵教の位を明かして通教を格る。二に三蔵教の位に約して別教を格る。三に三蔵教の位を明かして円教を格る。

##### 3.4211 通教を格る

一に三蔵教の位を明かして通教を格るとは、若し声聞・縁覚を論ぜば、通教に二乗を明かすと殊ならず。若し大乘に位を明かすに約さば、此れは則ち大いに殊別と為す。

所以は何ん。三蔵教に三阿僧祇劫に修行し、乃ち補処即ち是れ淨無垢の位に至るを明かす。止だ通教の柔順忍・性地忍・法中忍と齊しきことを得。若是し三蔵の仏は但だ通教の仏地に齊しきことを得ば、正習は俱に尽き、以て相い齊しきなり。傍ら三蔵の仏を論ずるに、是れ析法の智を拙と為し、通教の仏は是れ体法なるが故に巧と為す。『智度論』に云うが如し、「阿羅漢地は

声聞經の中に於いて、之れを名づけて仏と為す。但<sup>44</sup>だ二種の涅槃を得るのみ<sup>45</sup>と。今謂わく、皆な正使を除けば、已辨<sup>46</sup>地と齊し。若し二諦満ち、習氣尽くるを取らば、羅漢は豈に仏と齊しきことを得んや<sup>47</sup>。

### 3.4212 別教を格る

二に三蔵教の位を用て別教の位を格るを明かすとは、三蔵は一生補処の淨無垢の位を明かす。別教を格るに、<sup>543a</sup>鉄輪十信の第十の願心と齊し。仏地は但だ別教の初地と齊しきなり。此れは乃ち正意なり。傍ら論ずるに、通教に類して知る可きなり。

### 3.4213 円教を格る

三に三蔵教もて円教の位を格るを明かすとは、三蔵の補処の淨無垢稱の位は、但だ円教の五品弟子の第五品と齊し。仏地は十住の初發心住と齊し。正義は此の如し。傍ら論ずるに、互いに優劣有り。三蔵の仏は正習俱に尽く。此れは乃ち齊しと為す。明らかに仏性を見て無明を断ずることをせざるは、此れを劣と為すなり。故に『華嚴經』は初發心住の菩薩を歎じて云わく、「初發心は已に牟尼を過ぐるなり」<sup>48</sup>と。

### 3.422 通教の位を用て後の二教の位を格る

二に通教の位を用て後の二教の位を格るを明かす。即ち二と為す。一に別

---

44 但 底本の「俱」を、文意と『四教義』(後注47を参照)によって改める。

45 『智度論』に云うが如し、「阿羅漢地は声聞經の中に於いて、之れを名づけて仏と為す。俱に二種の涅槃を得」 出典未詳。

46 辨 底本の「辨」を、文意によって改める。

47 若し二諦の満を取り、習氣尽かば、羅漢は豈に仏と齊しきことを得んや 『四教義』卷第十二、「問曰、智度論云、阿羅漢地於声聞經中、名之為仏。但得二種涅槃。答曰、今謂皆除正使。已辨(→辨)地齊。若取二諦満正習尽、二仏齊也」(T46, no. 1929, p. 766, b18-21)を参照。

48 『華嚴經』は初發心住の菩薩を歎じて云わく、「初發心は已に牟尼を過ぐるなり」『六十卷華嚴經』に「初發心」は頻出するが、出典未詳。

教を格り、二に円教を格る。

### 3.4221 別教を格る

一に別教の位を格るを明かすとは、通教に補処の淨無垢の位を明かす。往きて格るに、但だ別教の十行と齊しきのみ。通教の仏果は、但だ十地の初歡喜地と齊し。正義は此の如し。傍ら論ずるに、劣ること有る者は、相似の中道智<sup>49</sup>もて無明を伏すること無きなり。

### 3.4222 円教を格る

二に通教の位もて円教を格ることを明かすとは、若し通教に補処の淨無垢の位を明かさば、但だ円教の鉄輪の位十信<sup>50</sup>の第十の願心と齊し。仏果は但だ初發心住と齊しと明かす。此れは是れ一往之れを格る。正しく優劣を論ずるに、初發心住は初發心に能く中道法身を顕わし、無明の一品を断ずるを以て勝と為すなり。

### 3.423 別教もて円教の位を格る

三に別教もて円教の位を格るを明かすとは、若し別教に法身、法雲<sup>51</sup>、一生補処の淨無垢稱を明かさば、但だ円教の十住の第十の灌頂住と齊し。仏地は十一品の無明を断ず。但だ十行の初歡喜行と齊し。若し『仁王經』の十地を開いて三十生と為すに依らば<sup>52</sup>、是れ則ち無垢は法界無量の迴向の位と齊し。仏

---

49 相似の中道智 『法華玄義』卷第三上、「六根淨位獲相似中道智」(T33, no. 1716, p. 709, a23) を参照。

50 円教の鉄輪の位十信 『法華玄義』卷第五上、「纓珞云、一信有十、十信有百。百法為一切法之根本也。是名円教鉄輪十信位、即是六根清淨、円教似解、燻、頂、忍、世第一法」(T33, no. 1716, p. 733, c25-27) を参照。

51 法雲 別教の十地のなかの第十法雲地を指す。

52 若し『仁王經』に依りて十地を開いて三十生と為さば 『仁王般若波羅蜜經』卷上、觀空品、「十地三十生空故、始生住生終生不可得、地地中三生空故、亦非薩婆若、非摩訶衍空故」(T08, no. 245, p. 826, a29-b2) を参照。

地は十地の初歡喜地と齊し。是れ則ち別教に一生補處を明かして、円教の位に望む。若し前積に義を以て往推するに依らば、猶お三十一品の無明有り。若し後に『仁王經』を引くに依らば、即ち猶お十一品の無明有り。是れ則ち別・円の法身の補處は、通じて位に約すと雖も、無垢稱の義は懸かに殊なり。豈に一概して維摩詰の名を積することを得んや。

問うて曰う。至道を尋ぬるに、是れ一なり。若し前の方便の三教に明かす所を格らば、補處と仏果は遂に伝爾として懸かに殊なり。此の意は解し難し。

答えて曰う。二義もて往積す。一に有教有人、二に有教無人なり。若是し三教<sup>543b</sup>の方便の説、因中に教を稟くるの者ならば、即ち並びに有教有人なり。仏果、補處、及び上位の菩薩は、能く三教を説く。此れは並びに有教無人なり。所以は何ん。稟くる所の三教の行人は、教に因りて各おの其の利を獲。故に有教有人なり。能説の教主は示現して三教の仏と為る。菩薩は物をして果を慕い因を行ぜしむ。因行は既に成ずれば、則ち復た化主無し。斯の如く乃ち縁感ずれば便ち応じ、縁謝すれば便ち息む。空拳もて小兒を誑し、引將いて家に還らしむ。手の内に実に物無きなり。三教の化主も亦た皆な是の如し。若是し円教は有教有人ならば、因中に教を稟け、乃至、法雲は有教有人なり。四十一品の無明を斷ずる法身の補處は、此れは實にして虚ならず。妙覺の法身は無説の説にして、即ち是れ果上の有教有人なり。有教無人は、之れを目標<sup>な</sup>づけて權と為す。有教有人は、之れを名づけて實と為す。

問うて曰う。若し爾らば、四教に果を明かすに、權實を分つ可し。四教の因地は、皆な有教有人なり。何ぞ其の權實を分つことを得ん。

答えて曰う。今、三教の人を明かして、名づけて權人と為す。円教を稟くるの人は、則ち人教俱に實なり。故に四教に因を明かすに、權實を分つなり。

問うて曰う。三教の因は既に權人を立つれば、三教の果は何の意ぞ權人を辨ずることを得ざるや。

答えて曰う。三教の行人は、円人と成る可し。三教の仏、因を修して円仏と作ること有ること無し。故に類に非ざるなり。

### 3.43 興廢を明かす

第三に興廢を明かすとは、即ち二意と為す。一に權教に興有り廢有り。二に實教に興有れども廢さず。

#### 3.431 權經に興有り廢有るを明かす

一に權教に興廢有るを明かすとは、即ち三意と為す。

##### 3.4311 三藏教の興廢を明かす

一に三藏教の機縁起きえんこれば則ち興り、機謝すれば則ち廢す。言う所の機とは、発す可きの義、之れを名づけて機と為す。前縁に小の樂欲有りて起こす可く、小善は生ず可く、小悪は治す可く、偏眞の解は発す可し。故に須らく四悉檀を用うべし。声聞經の中に於いて、因縁生滅の四諦・十二因縁・六度の教を説いて、三乗の道を開く。聞けば則ち機に称い、樂欲の心は起こり、善を生じ、悪を斷ず。若是し二乗は眞無漏を發せば、有余涅槃を証す。若是し菩薩は六度もて心を調べ、伏忍・柔順忍を得るなり。故に『法華經』に「小智は小法を樂い、自ら作仏を信ぜず。是の故に方便を以て分別して諸果を説く」と云うは<sup>53</sup>、此の機縁と為す。三藏の伏結、補処の菩薩、淨無垢稱の義、<sup>543c</sup>三十四心の仏果、有余涅槃に住するの仏無しと雖も、四悉檀もて此の教を起こすを欲せんが為めの故に、此の教の形声を示現して、機に赴いて物を度す。故に『法華經』に明かさく、「長者は即ち瓔珞を脱ぎ、弊垢の衣を著し、除糞の器を執り、畏るる所有るかたどに状りて、諸の作人に語る」<sup>54</sup>と。即ち是れ三藏教興るの義なり。

53 『法華經』に「小智は小法を樂い、自ら作仏を信ぜず。是の故に方便を以て分別して諸果を説く」と云うは 『法華經』方便品、「智樂小法、不自信作仏、是故以方便、分別說諸果」(T09, no. 262, p. 9, c25-27)を参照。

54 『法華經』に明かさく、「長者は即ち瓔珞を脱ぎ、弊垢衣を著し、除糞の器を執り、畏るる所有るに状りて、諸の作人に語る」『法華經』信解品、「即脱瓔珞、細軟上服、嚴飾之具、更著弊垢膩之衣、塵土全身、右手執持除糞之器、状有所畏、語諸作人」(同前, p. 17, a15-17)を参照。

癡とは、此の小欲は將に歇<sup>2</sup>きんとし、小善は已に成じ、事悪は既に除き、真解は已に発す。是れ則ち四縁<sup>55</sup>は俱に息めば、則ち三藏の所説の教、能説の人は、俱に癡<sup>56</sup>するなり。

### 3.4312 通教の興廢を明かす

二に通教の興癡<sup>57</sup>を明かすとは、興は則ち機興り、癡は則ち機癡す。機興りて教興る。教興るとは、無生の四諦の樂欲は將に起らんとし、体仮入空の善は生ず可く、理に迷う見思は斷ず可く、即眞の解は発す可し。故に須らく四悉檀を用て、無生の四諦を説くべし。通教の三乗は、聞けば則ち樂欲の心は起りて、善を生じ、惡を斷ず。三乗は同じく即眞無漏の慧を發し、第一義を見る。二乗は有余涅槃に住し、菩薩は則ち空に滞らず。慈悲もて仮に入り物を化し、誓いて仏果を求む。此の縁に赴いて、通教の斷結侵習、上地の補処の菩薩、淨無垢稱の位、一念相應の斷習、仏果の位の有余涅槃無しと雖も、教を起こさんが為めに、此の三乗の根縁に赴いて、此の教の形声を示現す。悉檀もて縁に赴き物に返す。故に名づけて興と為す。

癡とは、四機は既に息み、縁謝すれば則ち癡す。所説の通教、能説の人は、俱に癡するなり。

### 3.4313 別教の興廢を明かす

三に別教の興癡を明かすとは、興は則ち機興り教興る。無量四諦の樂欲は將に起こらんとす。從空入仮の善根は生ず可く、無量恒沙の煩惱の別惑と見思は治す可く、中道第一義諦の眞解は發す可し。故に四悉檀を用て、無量の四諦を説き、別教の菩薩に赴く。聞けば則ち樂欲の心起こり、界外の善を生

55 四縁 四悉檀を受ける四種の機縁。後に出る「四機」と同じ。

56 癡 底本の「癡」を、文意と『四教義』によって改める。『四教義』卷第十二、「是則四縁俱息、則三藏所説之教、能説之人俱廢也」(T46, no. 1929, p. 767, b1-2)を参照。

57 癡 底本の「癡」を、文意と『四教義』によって改める。『四教義』卷第十二、「二明通教興廢者、興則機興、廢則機廢」(同前, p. 767, b2-3)を参照。

じ、界外の悪を断じ、中道の相似の無漏、及び真の無漏を発し、常住の仏果、大涅槃を求む。此の機縁に赴かんがために、別教に十品の無明を断じ、法身の補処の菩薩、十一品の無明を断じ、仏果を究竟すること無しと雖も、此の教の形声を示現す。悉檀を用て、物の機縁に赴き、無量の四聖諦を説く。故に別教興ると名づく。

癡とは、四機既に息み、縁謝すれば則ち癡す。所説の別教、能説の別教、明かす所の上地の補処の菩薩・仏果は、俱に癡するなり。

### 3.432 実教は興有りて癡せざるを明かす

二に実教の興りて癡<sup>544a</sup>せざるを明かすとは、即ち是れ円教は但だ興るのみにして癡さざるなり。『華嚴』、『方等』、『法華』、『涅槃』に説く所の円教の若きは、円機に赴く。楽欲して、善を生じ、悪を断じ、中道第一義諦を見る。是れ則ち初発心従り無垢地に至るまで、四の根縁に赴き、常に此の教を説き、等覺・仏に至る。故に名づけて興と為す。故に三十二の菩薩、文殊師利等は、皆な入不二法門を説く。即ち是れ教興るの意なり。若し妙覺を証し、無師自悟せば、法として欲す可き無く、善として生ず可き無く、悪として断ず可き無く、更に深理の見る可き無し。言辞の相は寂滅し、本自と興無し。故に癡無きなり。癡無きも、亦た癡を論ずることを得とは、四悉檀の機尽くれば、則ち教息む。故に癡と名づくるなり。故に『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字として説く可き無し」<sup>58</sup>と。『涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なるが故なり」<sup>59</sup>と。故に浄名は黙然として口を杜ぎ、復た言を以て無言の理を言わず。文殊は称歎して、絶言を表するなり<sup>60</sup>。是れ則ち因に在りては有人有教なり。果に至り

58 『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字として説く可き無し」『大品般若經』卷第五、広乗品、「茶字門、入諸法辺竟処故不終不生、過茶無字可説。何以故。更無字故。諸字無礙、無名亦滅、不可説不可示、不可見不可書」(T08, no. 223, p. 256, b10-13)を参照。

59 前注19を参照。

60 浄名は黙然として口を杜ぎ、復た言を以て無言の理を言わず。文殊は称歎して、絶言を表するなり「杜口」は、口をふさぐこと、沈黙すること。『維摩經』入不二法門品における維摩詰の沈黙に基づく表現。「絶言」は、言葉で表現できないことを意味する。



ては、即ち教癡し人存す。三徳涅槃は湛然として清浄なり。豈に前の三教の補処の菩薩、菩提、仏果は、皆な有教無人なるに同じからん。教癡すれば、人も亦た随いて癡す。権実の意は、此<sup>61</sup>に顕わるるなり。

---

61 此 底本の「在」を宋本によって改める。